

空



2003年

SORA 2号

晴夜 ②

柴田 佐知子

潮流を引つぱつてきし桜鯛

田を重ね島の高まる旧端午

貝風鈴ひびく夕餉となりにけり

玄海に頭を揃へたる鯉幟

涼しかり思ひを声にすることも

祭唄遠しひとりの灯はひとつ

御開帳

苑
実
耶

大杉はまつすぐ空へ御開帳

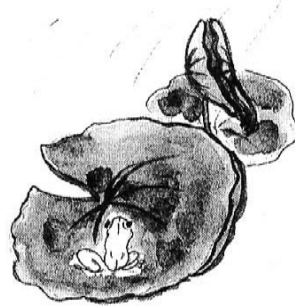
百の燭大きく揺れて御開帳

御開帳弥勒の御手に皺もなし

線香の匂ひ濃くなる御開帳

本尊は煙に遠し御開帳

諳じるほどの繰り言木瓜赤し



草餅や誕生会の父の席

サイネリア自分を好きになるがいい

ただ向かひ合うてゐるのみ春炬燵

沈丁花父は無口を通し逝く

海女あがる黒潮の髪曳きながら

勝つために退く将棋夏浅し

葉桜や男同士のカフェテラス

茅花流し子が結婚を口にせり

子は同じやうに育たず土用藤

いつの頃からか「夫」を「ツマ」と詠むようになった。俳句を始めて言葉や漢字の美しさ、面白さを知った。俳句を作らなければ一生知ることもなかったよ
うな気がする。新しい出会いに季寄せや辞書をめくるひと時が楽しい。普段何気なくやっている草刈や髪を洗うことを詠む。

日常が俳句になっていく喜びを感じつつ、夫との語らいの中にも句の題材が見えてきた。

春 祭

高倉恵美子

青空をささへてゐたる大桜

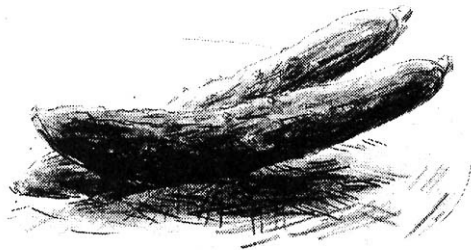
新しき村人加へ花見かな

桜より桜へ雲の動きをり

捨てられし犬が来てゐる花筵

巢作りに花の蕾も加へをり

花いちもんめ歌詞を忘れし日永かな



通り抜け出来る古墳や鳥の恋

老人の部屋は日だまり牡丹咲く

紫木蓮ひとつ違ひの喜寿となり

蒲団屋も魚屋もある植木市

筍を配る順番決めてをり

ふつくらと豆の煮えたる春祭

裏口は開けしままなり木瓜の花

山笑ふ共に忘るる齡となり

椽の花昔の人はよく歩き

長女が生まれたとき、桜の木を庭に植えた。その木ももう五十年、今では毎年見事な花を咲かせ家族を楽しませてくれている。どこにも行かずに毎日花見が出来るなんてとてもせいたくな気がする。

ひとつ違いの夫は今年で喜寿を迎え、朝な夕なに二人で楽しんでる。あと何年二人一緒に桜の季節を迎えられるだろうか。

眠り箱

遠野 萌

青空を畳みて寄する春の波

朧上げの空に抛られ卒業す

おほかたは嘴のあとつく紅椿

傷癒えし鳥を放ちし春野かな

尿る子をつつく雄鶏あたたかし

蓬餅のどこを触れてもやはらかし



春昼の新幹線は眠り箱

剪定の鋏の音に目覚めけり

勝ち鶏のまだ毳立ちて籠の中

杉菜生ふ我が家は男の子ばかりなり

青空の沖までつづく仏生会

薫風や少女の髪に光の輪

父に打つ草矢は永久に届かざり

動くまで亀を見てゐる鷗外忌

囲はれて神馬は蒼し楠若葉

「花は年に一度しか咲かんからその花の前でたくさん褒めてやらんとね」というのが祖母の口癖だった。また、祖父は野の花の素朴さを愛しいつも部屋を飾っていた。

私が花好きなのはそんな祖父母の血を受け継いだのだろう。

今日も「咲いてくれてありがとう」と思いながら庭に立っている。

鱗鱗の丈

青山 悠

まぼろしの鱗鱗の丈や春の雲

菜の花やうねりうねりて筑後川

摘草やちらばつてゐる子供靴

しやぼん玉吹いて寄り目になつてゐし

窓ごとに蒲団干しあり遍路宿

あたたかや軒下をゆくどんこ舟



桜烏賊干されて雲と触れ合へり

陶工の憩ふ霞める山を見て

減塩を医師に説かるる花の昼

粛々と遷座の列や月おぼろ

雲中に入りし神の嶺燕来る

神鈴にこちら向きたる蝮蛇草

山削る音がひねもす苗代寒

滴れる山ふところに尼老いし

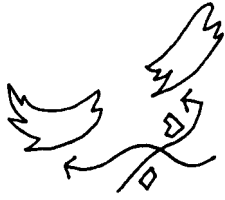
万緑に沈みて島の狼煙台

砂嘴を伸ばして玄界灘と博多湾を分か
つ海の中道を通つて、志賀島の展望台へ。

百八十度の春景色を堪能して下る途中
道に迷つてしまった。島のことだし行け
るところまで行つてみようと、袋掛けが
終わった山道を抜けると急にげんげ田が
広がった。

なつかしい子供の頃に還つたようであ
らしい一日であった。

膝つけば島のげんげ田浮きあがる 悠



経 蔵

ふじの茜

初 風 や 紫 に 凝 る 桜 島

老松をえらびて結ぶ初みくじ

挨拶の訥々として冬の菊

佐多岬樫のみのけもの道

江の電の過ぎて桜のこぼれけり

花冷えや謡にありし冠着山

世界遺産経蔵までの花の磴

慶州・海印寺

萩 往 還

内 藤 玲 二



いくたびも水引き寄せて紙を漉く

毛利氏の鬼門に椿群生す

藤棚の下を泳いで抜けにけり

これ以上太れぬ鯉や夕長し

真黒く機関車過ぎし夏野かな

万緑の山越えてくる志士の道

塔仰ぐとき夏空に我も入る